

"Fake"Dictators : A Menace to Propaganda

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-08-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大木, ゆみ メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6491

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



削られた独裁者—プロパガンダの脅威<1>

大 木 ゆ み

はじめに

「ひとりの人間が死ぬたびごとにひとつの世界が減んでゆく」¹ (18) —ドイツの哲学者、ショーペンハウエルは言った。皮肉なことに彼の著作を愛読していたヒトラーは第二次世界大戦においてあまりにも多くの「世界」を減ぼすこととなった。「独裁者」と呼ばれるヒトラーと彼の暴挙は現在もなおその傷跡を残しており、今や彼の名は独裁的傾向の国家や人物などの比喻となっている。ヒトラー率いるナチスの数々の行動の実現は、彼らが人間性を巧妙に利用したプロパガンダの成功を意味する。

同時代のイギリス人作家であり現代において全体主義批判の例としてその著作が挙げられるジョージ・オーウェルは、スペイン内戦と第一次、第二次世界大戦の体験により、ファシズム的恐怖政治、そしてその中核を成すプロパガンダに対して強い懸念を示している。主著『動物農場』(*Animal Farm*, 1945), 『一九八四年』(*Nineteen Eighty-Four*, 1949)において、オーウェルはプロパガンダに支配された全体主義国家の恐怖を具現化した。両作品は一般的見解やオーウェル自身の言及でもスターリニズム批判が主題とされているが、そのプロパガンダ描写については明らかにナチズムの片鱗も見受けられる。オーウェルとヒトラー、同時代に生き、反全体主義者と全体主義の体現者である二人を結びつけるプロパガンダと独裁者の関係性を考察する。

1. 見えないリーダー

「他の独裁者たちは皆、我々に似ていた者たちでさえ、臆病で偽善者だった。ナチス・ドイツもロシア共産党も方法論においては我々に極めて近かったが、彼らには〔権力追求の〕動機を認めるだけの勇氣はなかった」² (276) —『一九八四年』において真理省官僚のオブライエン（大戦期から冷戦期に暗躍したスパイ、ケンブリッジ・ファイブの一人ガイ・バージェスがモデルと言われている）は国家反逆罪として捕えられた主人公ウィンストンに言う。作中

の全体主義国家は明らかに二つの大戦の影響が見られ、特にオーウェルが以前から標的としていたスターリニズム的、そしてナチズム的様相を呈する。

だが、オーウェルがプロパガンダへの懸念を強めたのは自身が POUM（統一マルキスト労働党）の一人員として参加したスペイン内戦であることは否めない。スペイン内戦においてオーウェルは参戦していた国々や部隊のプロパガンダ合戦を目の当たりにしたのだが、彼はむしろ自分を含む兵士が感じる極度の緊張と退屈の中に、人間が自ら生み出すプロパガンダに注目していたことが著書『カタロニア讃歌』（*Homage to Catalonia*, 1938）から分かる。「戦闘、銃声、食糧と睡眠の不足、屋根の上に座って、いつ自分が撃たれるか、誰かを撃たなければならなくなるか考えている緊張と退屈の入り混じった時間、それは長い悪夢で、僕の神経をすり減らした」³（135）とオーウェルが言うように、戦場においては実戦ではなくむしろ戦いの間に生まれる殺戮と死への恐怖、そして繰り返される日常に対する退屈こそが、何よりも苦痛であったことが分かる。そしてこの苦痛が人を疑心暗鬼にさせ不信感に満ちた状況を容易に生み出す。例えばオーウェルは友人ジョルジュ・コップから「今ちょうど受け取った情報によると、政府は POUM を非合法化し、宣戦布告しようとしている」³（124）とか、どこからともなく『『彼ら』が水の供給を止めようとしているという噂」³（125）を耳にするのだが、結局何も起こらずそこには変わらぬ日常が続くばかりであった。ここでオーウェルは括弧付けで『『彼ら』が何者なのか誰も知らなかった」³（124）と加筆するほど、正気ならばあるはずのない、得体の知れない「彼ら」を容易に信じてしまうような人間性に注目していた。POUM が占拠するホテルにはオーウェルの言うところの「スパイ恐怖症」³（127）、つまり「恐ろしい不信感が蔓延しつつあった」³（127）という。プロパガンダとは、スローガンのように具体的な言葉で受け手を納得させるものだけでなく、あえて明示しないことによって人間の不安と想像力を巧みに利用し最大限の効力を発揮させるものでもあるのだ。曖昧さとそれが生み出す漠然とした不信感や恐怖はプロパガンダの肥やしであり、人間にとってある意味最大の脅威となりうる。

例えば『動物農場』においては、人間を追い出した後、動物たちの国家の主となった豚によって作成された十戒がプロパガンダの脅威の象徴である。かつては全ての動物のためのものであった十戒は、二足歩行をするようになった豚によっていつの間にか都合の良いように「四本脚は良い、二本脚は

もっと良い」⁴ (104) と書き換えられるが、いつしか被支配者になってしまった動物たちは疑問を抱くことなく新たな十戒を受け入れる。そして『一九八四年』においては全体主義国家オセアニアの絶対的支配者ビッグ・ブラザーを直に見た大衆は誰一人としていないが、彼の功績を疑うことなく信じ、絶対的指導者として崇める。これこそが人間の弱点であり、プロパガンディストにとってはこれ以上ないキーなのだ。

『一九八四年』における描写—大衆は戦時下の厳格な規則と変わらぬ日常、そして常に誰かに監視されている（我が子にさえ密告される可能性さえもある）状況は、いわゆる全体主義国家の特徴を表すと同時に、オーウェルが『カタロニア讃歌』で言及する「緊張と退屈の入り混じった時間」そのものである。このような状況において、人は絶対的存在を求める。これこそが、絶対的支配者ビッグ・ブラザーであり、それを擁護する党であり、それらは時に神の如く扱われ、大衆の絶対的崇拜と尊敬の対象であると同時に逆らってはならないもの（逆らうことは罪である—肅清すら善と解する可能性をも意味する）と定義される。オブライエンはウィンストンに言う、「現実とは人間の頭の中にだけ存在していて、それ以外の所には存在しないのだ。・・・集団主義的で不滅である党の精神の中にしか存在し得ないのだ。党が真実だと判断するものは何であれ真実なのだ。党の目を通して見る以外現実を見ることはできない」² (261)。曖昧さと人間自らの想像力が生み出す不安が渦巻く世界において、唯一の絶対的存在ビッグ・ブラザーが、党が創った幻影にすぎないこと、つまり実体のないものですら大衆に有無を言わせずその存在を信じ込ませるプロパガンダの危険性がオブライエンによって明示されている。

2. 見せかけのユートピア

「戦争は平和である 自由は屈従である 無知は力である」² (29) —『一九八四年』におけるオセアニアのスローガンは、まさにプロパガンダそのものである。大衆操作の重要なキーとなるプロパガンダについては、『プロパガンダ』(2002)の著者プラトカニスとアロンソンがプロパガンダ=説得と解している—哲学者アリストテレスの理論によると説得には三つの側面—1: 説得の源泉エトス, 2: メッセージ: ログス, 3: 受け手の感情パトス—があり、古代ギリシア哲学でも解かれていたように「説得はありふれた電灯と同様、けっして神秘的なものではない」⁵ (28) とする。そして現代の説得

理論については、1：精神分析，2：学習理論，3：認知的アプローチという心理学における三つの主要な考え方を提示している。

彼らは、プロパガンディストに長年使われている学習理論を基盤とした説得の原理—「説得的メッセージは、受け手がそれを学習し、受け入れた時に初めて説得効果を持つ。宣伝は、まず受け手がそれに注目し、理解し、学習し、記憶し、それにもとづいて行動するようなものではなくてはならない」⁵ (25) —の例としてオルダス・ハクスリーの『すばらしい新世界』(*Brave New World*, 1932) やアンソニー・バーजेスの『時計仕掛けのオレンジ』(*A Clockwork Orange*, 1962) を挙げ、その「行動の原理に完全に支配された未来の世界」⁵ (25) は度々批判の対象になるとしている。さらに説得効果を高めるものとしての認知反応アプローチ—「成功する説得戦術というのは、送り手の観点に同意するように受け手の思考を方向づけると同時に、そこで提唱されている行為に関する否定的な思考を妨げ、肯定的な思考を促進するものである」⁵ (27) —を提示している。上述の二作品はもちろん、オーウェルの『動物農場』、『一九八四年』などのディストピア小説の多くは、彼らが提唱する現代のプロパガンダ理論を含んでおり、それらが示すディストピアとは、人間が人間性を巧妙に利用し創り出した見せかけのユートピアのようである。そしてこの「見せかけ」こそが、プロパガンダを狂気へと導くキーでもあるのだ。

同著者たちは戦場におけるプロパガンダの効力を「戦時中の宣伝の最も破壊的な機能の一つは、ある国の国民が別の国の国民を、罪悪感を感じることをなしに破滅に追いやることを容易にすることである」⁵ (43)、「敵を非人道化することは、敵に残虐な行為を行うことによって生み出される不協和を解消するのに役立つ。・・・自分が行った残虐な行為を正当化すればするほど、残虐な行為を行うことが容易になるのである」⁵ (44) と定義づける。オーウェル自身も『カタロニア讃歌』で「いつ自分が撃たれるか、こっちが誰かを撃たなければならなくなるか」³ (211) と語るように、自らの死に対しては勿論、他者を死に追いやることへの恐怖も感じているのである。このような人間性にプロパガンディストは容赦なく付け込み、プロパガンダを以て殺人行為を善行へと転化する。つまりプロパガンダは「誤りに対して寛容でなく、失敗を罪悪とみなすような文化のなかで生活している」⁵ (45) 人間の自己防衛機能を大いに利用し、殺人行為に対する自責の念を「そうせざるをえなかった」

と自己正当化させる。これが、社会心理学者レオン・フェスティンガーが提唱した認知的不協和理論—「人間が自分の行動をどのように合理化するかを記述し、予測しようとする理論…不協和を低減することによって、人は自我を守り、プラスの自己イメージを維持することができる」⁵ (38-39) —の一端である。

その際たる例はヒトラー率いるナチスによるユダヤ人大量虐殺だろう。ヒトラーは宣伝について「最も残酷な兵器であっても、それが素早い勝利をもたらすなら、人道的なものとなる」⁵ (291) と述べているように、プロパガンダによって残虐行為でさえ人道的なものへとすり替えられることを示唆している。当時反ナチスとして活動していたミュンツェンベルクは著書『武器としての宣伝』(1995)において「勝利を獲得するために宣伝がより広範に、そして頻々と展開されればされるだけ、暴力のほうもますますエスカレートしていった」⁶ (22), 「宣伝と暴力とは切り離せるものではなく、補完し合うものだ」⁶ (28) と述べており、上述の定義通り、ナチスの行動は人間の自己防衛的性質を巧みに利用していることがわかる。

これは『一九八四年』の主人公ウィンストンにも当てはまる。彼は静脈瘤持ちの冴えない自己否定的な男で、オセアニアの真理省で情報の改ざんを仕事とし、国家体制に疑問を抱きつつも職務を全うしている。ところが日記帳を手に入れたことをきっかけに、彼の反体制的行動はエスカレートしていく。彼は一つの罪を犯したことに対して罪悪感と焦燥感、恐怖と同時に、行為を正当化したことで達成感を感じ、まるで革命家にでもなったかのように同志を集めようとする。一見、ウィンストンは危険を顧みず真実を暴くヒーローのようだが、実は、プロパガンダの罠にかかる愚者なのだ。小説は、ウィンストンが国家の罠にはまり、オブライエンによって逮捕され洗脳されたのち銃殺されるところで幕を閉じる。作中、ウィンストンは度々戦争のなかった幼少期を思い出し、それを‘Golden Country’「黄金郷」と呼ぶ。作品全体を通して救いようのない状況の中で、思い起こされる‘Golden Country’は記憶の断片なのかそれとも白昼夢なのか。オセアニアにおいて記憶は意味を成さない。現実とは頭の中と党の精神の中にしか存在しないからだ。情報の改ざんであれ何であれ、たとえそこに違和感を覚えたとしても、党が真であるとするならば真であると解せねばならないのである。

オブライエンは拷問を受けても屈しないウィンストンに言う、「もし君が

人間であるとするなら、君は最後の人間だ。君のような人間は絶滅し、我々が後継者になる運命なのだ。…君は最後の人間だ…君は人間精神の守護者だ」² (282-283)。オーウェルは『一九八四年』のタイトルを「ヨーロッパ最後の男」にする予定だった。たとえウィンストンがいかにヒーローというような男でなくとも、国家に立ち向かう雄姿は「ヨーロッパ最後の男」のタイトルにふさわしく見える。だが、オーウェルは彼を最後まで戦い抜き勝利を手にする、あるいは自己犠牲的な聖職者のようなヒーローには仕立てなかった。ヒーローが悪を抹殺するという良くも悪くもハリウッド的な構図では彼の考える全体主義の脅威は描けない。というのも人間の脆弱性を巧妙に利用するプロパガンダあってこそその全体主義であり、恐れるべきものは主義でも支配者でも国家でもない。むしろプロパガンダによって創造される見せかけのユートピアを絶対的なものとして受け入れてしまう大衆こそが、オーウェルにとっての脅威だったのである。

3. 知識なき大衆—「無知の知」

「無知は力である」² (29) —知識の欠如こそプロパガンダの成功に欠かせないだけでなく、人間が独裁者となるのか、はたまたヒーローとなるのか、その命運を握っているのである。絶対的存在を創造するプロパガンダだが、それによって独裁者となりうるのは必ずしも選ばれた人間だけではなく、全ての人間が持ち合わせているある種の性質ゆえに誰しもそうなりうるのだ。

哲学者ショーペンハウエルは『意志と表象としての世界』(1819)において、プロパガンダに影響を与える「個体」(＝エゴイズム)という人間性について言及する—「際限なき世界のなかでは完全に消え入り無に帰しそうな個体が、それでも自分を世界の中心点となし、自分の生存と幸福とを他の何よりも考慮するのである。それどころか、自然な立場においては自分のために他の全員を犠牲にしようとさえ考えていて、大海の一滴である自分自身の個体だけを少しでも長く維持するためなら世界を破滅させるつもりでいるのである・・・自分自身の人格だけを現実の人格とし、他のすべての人格を単なる幻影と見なし、かつ幻影として扱う」⁷ (197)。この理論はフェスティンガーの認知的不協和理論と類似している。自己の維持のためなら他者を犠牲にすることを厭わないという、人間誰しもが持ち合わせている自己中心的あるいは自己防衛的性質ゆえに、誰しも独裁者となる可能性があり、我々は無意識

的にそれを認知しているからこそ、対極に位置する自己犠牲的ヒーローを渴望するのであろう。

オーウェルと同時代で反ナチスとしてレジスタンス活動をしていた作家カミュの不条理三部作の一つ、戯曲『カリギュラ』(*Caligula*, 1945)における主人公のローマ皇帝カリギュラは独裁性とヒーロー性を持ち合わせている。カリギュラは最愛の女性(妹)を亡くしたことをきっかけに奇行に走り残虐非道な皇帝と化するのだが、哲学的思想ゆえその言動を奇行と誤解されている節も、また自ら暴君を演じている節も見られる。

ある時、カリギュラは、「権力は不可能なものにチャンスを与える。今日を境に、わが自由にもはや限界はない」⁸ (33, 1:9) と宣言し、暴君へと変身を遂げる。さらに「これまでわが統治はうまく行き過ぎていた。ペストにみまわれたこともなく、残酷な宗教もなく、クーデターすらない。要するに、きみたちの名を後代に残し伝えるものがない。そのような含みもあって、わたしは、運命がこれまで用心深く控えてきたものを、埋め合わせしようと思う……このわたしがペストの代わりを務める。」⁸ (126, 4:9) と、善行を以て崇拜される存在ではなく、自らペストの代わり＝悪役を買って出ている。ここに愛するものを失い絶望し絶対的存在を求めていた弱々しいカリギュラはもはや見られず、彼は自ら被支配者から絶対的支配者へと変身した。これはウィンストンが未来へ向けて社会悪を暴露すべく日記を記し始める描写と重なる。絶望的状况において絶対が存在しない、つまり絶望からは救われないと悟ったカリギュラは、絶望を打ち砕くべく自己防衛のために自らを絶対的存在へ、ウィンストンは自らを革命家へと仕立て上げる。

両者は社会に蔓延る膿を出すために自ら悪を演じる自己犠牲的ヒーローにも見える。暴君について「自分の理念のために、あるいは野心のために、人民を犠牲にする者」⁸ (90, 3:2) とカリギュラは定義し、自らの権力行使はそうではなく絶望を創る「神々の愚かさと憎しみにたいする埋め合わせ」⁸ (91, 3:2) だとか、戦争を断った理由には「戦争による理想的な征服を尊ぶ以上に、人の命を尊ぶからだ」⁸ (91) と、ヒーロー的発言をしている。だが、これには続きがある—「だからといって、人の命を自分の命以上に尊重しているわけじゃない。おれは易々と人を殺す。というのも、おれには死ぬことなどなんでもないからだ。そう考えれば考えるほど、自分は暴君ではないという確信が深まる」⁸ (91-92, 3:2)。たしかにヒトラー的な独裁者ではなく、

どちらかといえば大衆のため悪を演じている節のあるカリギュラだが、結局のところ自身への慰めや自己中心的思考に帰結している。つまり、カリギュラは悪を露呈するヒーロー的要素、全てを計算し大衆を巻き込み支配する独裁性、利他的に自己中心的行動をとる暴君性を併せ持つ。

舞台はカリギュラの暗殺で幕を閉じる一最期の時、カリギュラが「歴史のなかに入るんだ、カリギュラ、歴史のなかになおれはまだ生きている！」⁸ (150, 4:14) と叫ぶように、自らの暗殺による死を以て「暴君」としての名を歴史に刻み永遠に生き続ける。

ミュンツェンベルクは「大衆心理学者ル・ボンは、神のように振る舞うのみならず、自分自身が神となり、元老院に馬を授けていたローマ皇帝たちを賛美している。すでにヒトラー宣伝は、ヒトラーの飼犬をゲルマンの神ヴォーダンのそばにいたカラスになぞらえている」⁶ (49) と述べている。カリギュラはまさに神のごとく振る舞うローマ皇帝であるが、ここで親ナチから賞賛されているような皇帝とは基本的に正反対である。カリギュラは言う―「あれは舞台芸術だ！あの者たち全員の間違いは、演劇を十分に信じていないことだ。もし信じていれば、人間はだれでも神々の悲劇を演じられ、そして神にもなれるということを知るはず」⁸ (92, 3:2)。彼は、自分は神ではなくあくまでも演者であることを強調し、その演技を大衆が見破れないこと、大衆の知識不足が諸悪の根源であることを知っており、無知を露呈するために神を演じ続ける。

一方ヒトラーは、たとえ創られたものであったとしても演じるのではなく神であろうとした。ミュンツェンベルクはヒトラー神話について次のように言及する―「飲み込みの早いゲッペルズは、とりわけヒトラーという人物にまつわる神話を作り出した。ヒトラー自身も意識的に作り出された神話に合わせるために全てのことを行った。救世主にスポットライトを当て、卓越した偉大な人物としてアピールするためには、こうした神話が宣伝の中核とならねばならなかった。その栄光の力によって、法外な要求でさえ、あえて支持者に訴え、命を懸けさせることができる」⁶ (49-50)。

カリギュラは自らの意思と知識で神を演じた者、一方でヒトラーは他者によって神として創られた者という構図を『一九八四年』に照らし合わせると、少々極論的ではあるが、カリギュラ＝ウィンストン、ヒトラー＝ビッグ・ブラザーと考えられる。ウィンストンはカリギュラのような権力も独裁性もな

いが、自らの意思と知識で真実を大衆に露呈しようとし、そしてその事実を後世にまで残そうと試みるヒーロー的要素がある点で一致する。一方、党によってある種の神話となり、真実を隠蔽し大衆を欺いたヒトラー同様、党の指導の下、絶対的支配者とされるビッグ・ブラザーは、その存在すら怪しいにもかかわらず大衆から崇拝の対象となっている。

絶対的存在なる者が、ヒーローなのか独裁者なのかを見極める眼なるものである知識は、大衆が身につけることで塗り固められた嘘を見抜く恐れがあるため、全体主義社会において不必要なものと定義されることが多い。1936年ニュールンベルク党大会以降のナチスが「宣伝はわれわれに権力を与えてくれたし、今日まで権力を維持させてくれた。そして、宣伝はわれわれに世界を征服させてくれるだろう」⁶ (22) と明言するように、プロパガンダがナチスにとっての核であることがわかる。そのプロパガンダを有効に働かせるには強い説得が必要となることは勿論だが、何よりも秘密裏に大衆を常に知識不足にしておくことが重要である。大衆の中に知識を求める反乱分子が生まれないように、哲学的且つ巧みな話術で大衆に学を授けている態を装い、印象的なスローガンを駆使し、さらにミュンツェンベルクが「宣伝と暴力は切り離せるものではなく、補完し合うものだ」⁶ (28) と言うところの粛清も行い、大衆を動員する。

ウィンストンとカリギュラは共に死という結末を迎える。自らの暗殺計画を知りながら、それを受け入れ、暴君を演じきったカリギュラとは異なり、ウィンストンは結局拷問に屈して洗脳され、自らの意志を貫くこともできず、国家反逆の罪で処刑される。つまり、革命家から単なる罪人に堕ちたのだ。『一九八四年』がディストピア小説の筆頭とされる所以はヒーローの墮落という結末にあるのかもしれない。だが、いずれにせよウィンストンは日記という手段で、カリギュラは奇行と暴君になりすますことで真実の露呈を試みる。全体主義国家オセアニアのスローガンの一つ「無知は力である」はオーウェルの大衆に対する皮肉であり警告でもある。そしてソクラテスの説く「無知の知」こそがこの対義語としてふさわしい言葉であると同時に、あらゆる偽ものを創り上げるプロパガンディストたちにとっては脅威となりうる一大衆が知識を持つことこそがあらゆるプロパガンダを打ち砕く術なのである。

4. 最後に

さらに我々の生活に入り込み戦争へと導いてしまうものは、兵器でも主義でもなくプロパガンダであり、それを回避する術こそが知識である。知識といえども、オーウェルの言う当時の左翼知識人的な頭でっかちなものではなく、真実を見極められる眼のことである。オーウェルがスペイン内戦で経験した「スパイ恐怖症」のように、絶対が見えない状況においては時に不安を呼び、不安は不信を生み、不信がやがて絶対的なものへの渴望へと変わる。特に戦時下あるいは不安定な状況における絶対的存在への渴望は、大衆を予想もしない方向に導くことがあり、大衆を誘導し説得してしまうプロパガンダこそが脅威なのである。オーウェルが警鐘を鳴らし続けているものは全体主義や独裁者そのものではなく、それらを創り上げるもの—プロパガンダと無意識にプロパガンダに取り込まれてしまう大衆なのだ。

オーウェルは警告する、「僕がこの戦争〔スペイン内戦〕について書いたことが、読者を惑わせないことを願っている。このような問題については完全に真実を語ることは誰にもできない。自分の眼で見たこと以外には、いかなることも確信を持ちがたい。意識的にしろ、無意識的にしろ、誰もがいずれかの党派の支持者として書いている・・・僕が取っている立場のことを忘れないで頂きたい。事実を誤認しているかも知れないし、事件の一端しか見ていないため、歪めて書いているかも知れないことに留意して頂きたい。同時に、スペイン内戦のこの時期のことについての他の本を読む場合も、全く同じことに注意して頂きたい」³ (195)。

現在、大量の情報の送受信が可能な世の中においては誰しもが簡単にプロパガンダの餌食となり第二のヒトラーを無意識に生み出す、あるいは自分自身がそうなりうることを留意しておかなければならない。

* George Orwell 作品の引用和訳は筆者による。

* 本稿の一部は筆者執筆のエッセイ「緊張と退屈の間に—プロパガンダへの警鐘」(『オーウェル研究第 36 号』)に基づく。

注

1. ショーペンハウエル. 石井立訳. 『自殺について』. 東京：角川学芸出版, 2012 (1955).
2. George Orwell. *Complete Works of George Orwell IX: Nineteen Eighty-Four*. London: Secker & Warburg, 1987.
3. George Orwell. *Homage to Catalonia*. London: Penguin, 2003 (Secker & Warburg, 1938).
4. George Orwell. *Animal Farm — A Fairy Story*. London: Secker & Warburg, 1954 (1945).
5. A. プラトカニス, E. アロンソン. 社会行動研究会訳. 『プロパガンダー—広告・政治宣伝のからくりを見抜く』. 東京：誠信書房, 2002 (1998).
6. ヴィリー・ミュンツェンベルク. 星乃治彦訳. 『武器としての宣伝』. 東京：柏書房, 1995.
7. 伊藤貴雄. 『ショーペンハウアー兵役拒否の哲学—戦争・法・国家』. 京都：晃洋書房, 2014.
8. アルベール・カミュ. 岩切正一郎訳. 『カリギュラ』. 東京：早川書房, 2014 (2008).

主要参考文献

The Complete Works of George Orwell. Ed. Peter Davison. 20 Vols. London: Secker & Warburg, 1996 (1986).
 草森紳一. 『ナチス・プロパガンダ 絶対の宣伝 vol.1-4』. 東京：番町書房, 1979 (1978). 角川出版, 2015.

* 本稿執筆の契機を与えてくださった方に心から感謝申し上げます。
 XHRGRCOLLVQUTARSSDLLAXBUSYFNPRSGBYIMVBUQAERDEYJ